

平成二十九年「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「二席」

出不精の妻浮き立つや花の道

藤本卓昭(卓水)

(評) 普段の生活のなか出不精の妻が浮き立つ、花のまわりみちの桜の美しさに感動したのである。妻の姿が見えるのは浮き立つという措辞。

「三席」

病床へ伝へる今朝の花の色

村越 縁

(評) 恐らく昨年と一緒に花のまわりみちに来た人が今年には病床に伏せているのか。一人で来たが、さすがに今朝の桜は格別、一人占めでなく、この美しさを病床の人に伝えたい気持になったのである。

「三席」

散り際の花弁に刺さる夕陽かな

森脇 希美

(評) 一瞬の美しさを捉えている。花びらを透く夕日を刺さると感じたのは鋭い。

入選

(五句)

杖ついて鬱金の桜見に来たり

中植勝己

(評)

杖をついてまで見たいという桜が鬱金である。見に来たり、言い放つには相当の鬱金^{ひいき}最^き戻^きであろう。

硬貨打つ音のかそけき花回廊

正山史明

(評)

硬貨を打つには相当の音がするであろうが、花を見に来ている人に、静かに見て貰いたいという局職員の気持ちである。

笙の音に桜吹雪のまわり道

川上由里子

(評)

桜門に入ると雅楽の音が流れていたのか、特に笙の音の鋭さに桜が散った。偶然であるにしても、笙と桜吹雪の調和がよい。

献茶会の帰りに友と桜見に

岩合由紀

(評)

優雅な一日を過ぎた。今日一日は満足であったであろう。

まんかいださくらの花が元気だね

そう本南

(評)

満開の桜と句を作った子と心が一つ。元気なのは句を作った子。

佳作

(十八句)

妹背てふ花に残れる昨夜の雨
琴の音に風も静まる八重桜
名桜の誉れの庭を歩みけり
花疲れ座して見渡すまわりみち
車椅子並びて花の中にあり
灯籠の灯りに映えて花満つる
畳む傘花卉一つつつ摘まむ
遅咲きの桜を愛でてまはり道
緑青の斑まだひな古銭花の雨
吹き寄せる花屑踏めばやわらかに
新任地ひろしまの空花吹雪
ふり向きてこの花々を見納める
濃淡の花見上げたり影見たり
凶鑑めく造幣局の桜かな
少しづつ色をたがへて花の雲
指しやぶりした手で拾う花の屑
花万朶園児の列がくぐりゆく
青空の楊貴妃桜うるみそむ

麻生通子
佐藤博雄(はくを)
小土井清和
竹岡佐千枝(さちえ)
谷口敬誠
徳田進
浜田邦雄
宮部真紀枝
山崎和子
野津訓子(訓子)
西尾洋子(みかん)
福場春子
鷺見澄子(葦月)
脇美恵子
大隅彪(三虎)
若宮直美
岡部利行
山中清子

選者吟

硬貨打つ音の止みたり夕桜

木村里風子